



杏雨書屋(きょううしょおく)は大阪市にある公益財団法人武田科学振興財団が運営する図書資料館。国宝や重要文化財のほか、国内でもトップクラスの古医書を収蔵しています。このコーナーでは先人が古医書に残した現代に通じるメッセージを、小曾戸先生に紐解いていただきます。2013年10月、杏雨書屋は大阪市中央区道修町に移転しました。

其ノ八 ないがひろく 内科秘録 — 連珠飲 —

案内人◇小曾戸 洋(北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 部長)

ほんま そうけん 本間棗軒と『内科秘録』

ルビーナの原方である連珠飲は日本人の創製になる漢方処方です。江戸時代の名医・本間棗軒(1804-72)は水戸の人で、代々の医家。通称は玄調。堂号は先代を継いで自準亭と称しました。漢方の師は水戸藩医であった原南陽です。さらに諸国をめぐって修行を重ねましたが、棗軒がとくに尊敬したのは紀州の華岡青洲でした。青洲は漢方の麻酔薬を開発し、世界ではじめて全身麻酔下での乳癌摘出手術に成功した日本の誇る偉人です。青洲の麻酔実験をめぐって献身する嫁姑の葛藤を描いた有吉佐和子の小説『華岡青洲の妻』は有名です。

棗軒は江戸で開業して華岡流医術を行い、大腿切断手術に成功し、水戸藩医に抱えられ水戸医学校の教授に昇進しました。著書に『瘍科秘録』(1837年著・1847年刊)、『続瘍科秘録』(1859年刊)、『内科秘録』(1864年刊)のほか、いずれも臨床的卓見に富んだ著述があります。



杏雨書屋蔵『内科秘録』(1864年刊本)の書扉、本間棗軒肖像、連珠飲の記述部分

連珠飲は婦人病の名処方

連珠飲は『瘍科秘録』(巻1)や『内科秘録』(巻5)に載っています。写真は『内科秘録』の記述部分ですが、「連珠飲。自準。諸の出血の後、虚悸(動悸)・眩暈し唇舌の刮白(滑白)なるを治す。苓桂朮甘湯合四物湯」とあります。自準とは本間家の薬室の号です。先代からの称ですが、浅田宗伯の『勿誤薬室方函』(1877年)に連珠飲の出典を「棗軒」としているの、本間棗軒の創製とみて良いかと思えます。



連珠飲は珠玉の生薬を
連ねた婦人の秘薬です。

は本間家の薬室の号です。先代からの称ですが、浅田宗伯の『勿誤薬室方函』(1877年)に連珠飲の出典を「棗軒」としているの、本間棗軒の創製とみて良いかと思えます。

苓桂朮甘湯は『傷寒論』および『金匱要略』が出典で、文字どおり茯苓・桂枝・朮・甘草の4味。四物湯は『和劑局方』(婦人諸疾)が出典で、当帰・芍薬・川芎・地黄の4味からなります。これらの8味はいずれも漢方では珠玉というべき重要な薬物です。連珠飲は、珠玉の生薬を連ねた婦人の秘薬と呼ぶにふさわしい名称でしょう。

小曾戸 洋(こそと ひろし)

日本医史学会理事、杏雨書屋副館長、上海中医药大学客員教授。1950年山口県下関で小曾戸薬局を営む小曾戸丈夫氏の長男として生まれる。宋の時代に散逸した貴重書『小品方』の発見や馬王堆(まおうたい)という中国湖南省にある紀元前2世紀の遺跡で発見された医書の解説により、中国でも医史学研究で著名な成果をあげる。主な著書『日本漢方典籍辞典』(大修館書店)、『中国医学古典と日本』(瑞書房)、『漢方の歴史』(大修館書店あじあブックス)。